

東都大学野球秋季リーグ戦で首位打者を獲得



背番号1が大槻主将

「首位打者を獲れたことは正直に嬉しかった。最終戦では、それほど首位打者を意識せずにプレーできたと思う。しかし、それ以上に青山学院大との優勝決定戦までコマを進めながら、2季連続で優勝できなかった悔しさの方が大きかったですね」と、自らの結果とチームの結果との間に微妙な心持ちをみせた。

高校時代は1、2年時に甲子園に出場。「バールが高いから」と、東都大学野球リーグでのプレーを選び、東洋大学に入学した。1年次は代打で起用され、2年次から少しずつ出場機会に恵まれていった。「中心選手として必要とされる選手」を目指し、練習する「それ自体にやりがいを感じた。しかし当初は全然打ってませんでした」と振り返る。それが、4年生になり打順が1番に。重要な打順になり、逆に聞き直して打つ

硬式野球部 主将 大槻 悦史さん

(マーケティング学科4年)



とを心に決めたところ、春季リーグ戦で大活躍。打撃部門で2位になり、2塁手のベストナインにも選ばれた。秋季リーグ戦からキャプテンに指名されたが、以前から副キャプテンを務めていたので、それまでと変わらず、チーム全体を見ていくことを心がけた。チームメイトからは「黙々と練習をこなし、頼りになる。背中でチームを引っ張っていくタイプ」と、絶大なキャプテンシーを発揮する。

大学で学んだこととして「4年間の寮生活で忍耐もつたし、人に頼らず、自分のことは自分でやることできるようになった。簡単に物事をあきらめなくなれたと思う」と振り返る。

今後は、強豪の日本通運(株)に入社し、活躍の場を社会人野球に移した上で、プロ野球を目指すことになる。「今年はずいぶんと優勝決定戦までいったが優勝できなかった。来年のチームにはなんとしても青山学院大に勝ってほしい。決して倒せない相手じゃないから」と、後輩たちに優勝の夢を引き継ぎ、自分の新しい目標を設定し旅立つ。

2005年度 第18回ACC学生CMコンクールで銀賞を受賞

島田 大輝さん

(経済学科3年)



「色々なアイデアを思いつくたびに形にしたいくなるんです」と目を輝かせる島田さん。書き溜めた小説はいまや6万字にもなった。万年赤字だったコピーショップのアルバイトでは黒字店舗を分析、売り上げ向上のための企画書を作っていました。ゼミでのグループ発表ではレジュメを読み上げる代々のスタイルからプレゼン方式を提案、資料のレイアウトも一新した。

「就職活動を意識し始めてからは、こうした方がよいのではないかと、どうすれば面白いかを常に考えている。自分の思いをどんな職業に結びつけたらよいか思い描くように。クリエイティブを仕事にしたい」という漠然とした憧れから、商品をつくるアイデアで魅せるのが勝負のCMプランナーという仕事に興味を持つようになりました。

こう決まったら行動力ある島田さん、学生対象では国内で一番規模の大きいこのCMコンテストのチャレンジを決めた。コンテストはテレビラジオの2部門があり、12社が協賛する12の商品の中から選んでオリジナルCMを作成する。島田さんらしさがあふれているのは応募

の仕方だ。「どの商品だからできる、できない」というのは悔しかった。両部門各12作品、計24作品をうち作り作って応募しました。課題は食品から日用雑貨まで多ジャンルに渡る幅広から、ホビー、ムードや実際のCMなどから企業家のようなイメージ戦略でその商品を売ろうとしているのかを分析し、数秒の中にも工夫を凝らした。そのこだわりがラジオ部門約3000通の応募の中の銀賞(3位)を射止めた。

苦勞したのはテレビ部門。ストーリーができて映像イメージを絵コンテで表さなければならぬ。「絵を描くのは得意」にながら、特訓の末12ページの絵コンテを書き上げた。

11月1日に東京プリンスホテルで行われた授賞式では同じくCM作りを目指す学生や、広告業界で働く人々と接し、将来の目標をますます強固なものにしたという。CMへの思いを語る島田さんは「ホビーやプロ顔負け。クリエイターとして大きく羽ばたけ！」

清涼飲料水「DAKARA」のラジオCM部門で銀賞を受賞。ホームページで島田さんの作品をご覧いただけます。http://www.acc-cm.or.jp/festival/05gakusei/05gakusei_result.html

「グリーンアート・フェスタ05inすがも・おおつか」で「豊島にぎわい創出機構社長賞」を受賞

「おばあちゃんの原宿」という独特の異名を持つ「果鴨」は極めて個性的な街。人生のセンパイたちの熱気に圧倒されつつもこちらまで元気になる。そんな雰囲気最大の魅力だ。

今回、この街で開催された「グリーンアートフェスタ05inすがも・おおつか」(主催 江戸東京園芸まつり実行委員会)に工学部建築学科のチームが出席し「見事」豊島にぎわい創出機構社長賞を受賞した。このイベントはかつてこの地域が植木商と飲食店が並んだ独特の行楽地であった歴史にちなむもの。



工学部建築学科 浅井研究室の13名

- メンバー(敬称略)
- 佐藤智洋 金安純平 佐藤弘康
 - 高野明雄 坂本明範 遠藤 聡
 - 豊田和馬 寺内 央 辻 孝祐
 - 小島翔太 丹治 建 (建築学科3年)
 - 氏家麻里子 (建築学科2年)

果鴨地区の街並みを飾る、「グリーンアート」を参加者が現地で制作、展示を行うというユニークな催しである。

実は、彼らはこの10月、来春から所属するゼミの顔合わせで初めて集った仲間「打ち解けあうきっかけに、みんなイベントに参加してみたい」という指導教員の浅井賢治先生の提案で参加することになり、締切まで一ヶ月を切る過密スケジュールの中、チャレンジした。

「設計に1週間、模型作成に1週間、施工で1週間。設計やフレーム造りには『設計製図や構造力学の授業が役立つ』でしたが、イメージと実際の施工とは全く違うんですね。施工に入ると、授業後に時間が出来た者から現地に出向いて少しずつ制作しました。模型とは違うスケールに達成の喜びがありました」と佐藤智洋さんは振り返る。

作品のタイトルは「共生」。人間は自然と向き合って生きるべきかという問いかけを含めました。「現在の空間では視覚だけで緑を感じさせ、未来の空間では緑が朽ち果てた無機質な世界を表現し、緑の大切さを訴えました。」

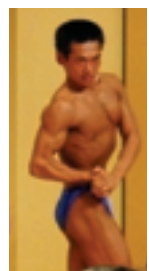
11月13日に行われた表彰式で、池田百合子環境大臣から感謝状を受け取った佐藤さんは、今後は研究室の皆と積極的にイベントに参加していきたい。この経験を活かし、また素晴らしい作品を作りたい」と絆が深まった仲間たちの受賞に満面の笑みで応えた。

このイベントには果鴨の街に魅力を感じるといふ若い若者が目立っていたという。そう、この街をおばあちゃんだけのものにしてはいけない。

全日本学生ボディビル選手権大会で11位

工学部ボディビル部 竹内 亮介さん

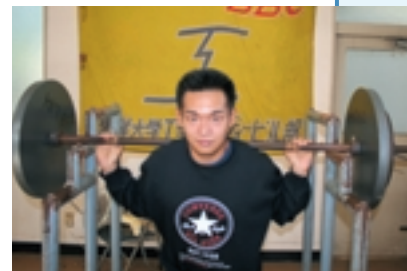
(コンピュータシミュレーション情報工学科4年)



小さい頃からテレビで見えるプロレスラーの筋肉を見て、「あんな体になりたい」と憧れていた。高校時代は山岳部。そして大学に入学すると、密かに入部を決めていた。竹内君は「昔から何かに挑戦するのが好きなのかもしれない」とチャレンジヤー精神を漲らせ、笑顔で胸を張った。

現在、部員は11名。練習はエアで時間を作って週に4日程度、川越キャンパスにある部室横のトレーニングルームで行う。また、忙しい時には一人でも近くの市民体育館に通い、約2時間程度行う。合宿は年1回、夏休みに鴨川セミナーハウスへ行く。もちろん日焼けをしても肉体的に輝かせるために「大会前には日焼けサロン代が3万円もかかるんですよ。これが痛かったです」。焼けて引き締まった肉体の方が評価は

「大会前には15kgくらい減量しますが、自分の肉体が変化していくのが面白い」とボディビルの魅力を語る竹内君。現在、矢川元基工学部教授のマイクロ計算工学研究室に所属し、卒業論文の製作に追われている日だ。「トレーニングをして自己の肉体が計算どおり変化していくことも卒業研究の評価に含まれていくんですよ」と竹内君は笑った。



高い。お金がなければ自然に任せて焼くしかない、というのがなんとも学生らしい。

今まで大変だったことを聞くと、「ボイスの練習時に恥ずかしさで戦うところかな。しかし、ある時、他大学のトレーニングジムへ行き、先輩に鏡の前でボイス練習をやるように言われたときに自分の中で何かが弾けた感じがしたんです。そこは色々なクラブが使用するジムで、大勢の人が真剣に鏡の前の自分に向かって。それから恥ずかしさは無くなって、自信を持つトレーニングができるようになりました。」